

※2022 2/22 赤字部分 推敲修正済み

新連載〈第4回〉「自転車の歴史と交通教育」

「19世紀英国のペン画からのメッセージ

～ コミュニケーション ～」

片山 昇

(交通教育 NPO OSCN じてんしゃスクール代表)

今回は、英国の自然とサイクリングをこよなく愛した19世紀の画家に焦点を当てたい。自転車文化の成熟期が表現されたペン画の世界を探访する。

～ ペン画広告 ～

前号迄、1896年に英国で出版された事典「Cycling」(Badminton Library 叢書)を紹介した。この本は、ハウツー本や実用書の範疇に入る。そこに掲載の絵は白黒の世界ながら、実に写実的表現が多い。情景描写、自転車のメカニカルな部分や当時の乗車ファッション、そして、サイクリストの表情まで詳細に伺い知ることができる。

現代ならば、イメージの表現や説明に写真を使用することも多いが、この時代は、絵画がその役割を担っていた。19世紀の自転車文化普及の上で様々な画家等が、実用書だけではなく、自転車の広告、湿布の広告(下絵)、そして、サイクリング専門誌等の挿絵画家として活躍していたのである。



上の絵は、1897年に、英国ロンドン郊外の「打ち身捻挫の湿布メーカー」が出した広告だ。(※1)

当時の自転車は、ブレーキ構造やギアの機構が充分とは言えず、下り坂での転倒事故が多かった。自転車に乗ったまま坂道を下ろうとし、制御できずに転ぶ「Knicker bockers」姿(※2)の男性。その様子を、女性が、淡々と見ている。「女性の自転車乗り」は、新スポーツスタイル「Bloomers」(※3)を身にまとっている。この時代の自転車文化の様相が凝縮されたペン画と言えよう。

著者は、Badminton Library 叢書の「Cycling」にも寄稿している著名画家 S. T. Dadd (1879-1914) (※4)。彼の描いた挿絵には、「ダウンヒル(下り坂)でのサイクリストへの示唆」を描いたものも多い。坂道が当時の自転車乗りにとって、如何に難所であったか、又、それ故、ペン画等でも安全啓発が行われていた時代の様相をも伺い知ることができる。

～ パターソン画集 ～

図書館の蔵書に、「サイクリング・ユートピア フランク・パターソン 画集」(文遊社)がある。この画集にまとめられた数々のペン画は、1900年前後の英国や欧州でのサイクリング風景がテーマだ。

これらの画は、当時の自転車雑誌「Cycling Weekly」(※5)や「CTC Gazette」(※6)の為に描かれたもので、近年になっても、英国で様々な画集にまとめられ、出版されてきた経緯をもつ。

実は、英国だけでなく、日本においても、サイクリング黎明期の先達のイメージモデルとなったのが、これらのペン画だとも言われている。

1925年以降(昭和初期)の日本では、菅沼達太郎氏(1899-1976)(※7)や鳥山新一氏(1919-2021)もパターソンのペン画から影響を受けたようだ。菅沼氏の描いた旅情溢れるペン画は、昭和の戦前戦後に出版のハイキング誌、山岳誌、さらには、サイクリング誌にも数多く掲載されていた。

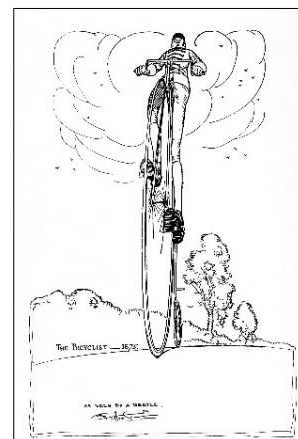
そして、近年の日本での自転車ブームを受け2013年に、パターソン画集として「サイクリング・ユートピア」が出版されたようである。

～ 「As seen by a Beetle」 ～

画家フランク・パターソン(1871-1952)は、旅情豊かで、メッセージ性のある風景を描いている。

「自転車」・「人」・「街」・「自然」という観点で描かれたコミュニケーション的風景は、国という垣根を越えてあらゆるサイクリング経験者に、多くのことを想起させ、そして、語りかける。

私は6年前、当図書館で初めて彼の画集に出会い、絵から感じたメッセージに感銘を受けた。この画家のもつ独特の視点に、自転車乗りとして共感を覚えた。その中から、2作品を紹介しよう。



上の絵は、日本で「だるま自転車」(※8)と呼ばれた「Penny Farthing (Ordinary)」型自転車だ。独特の構図で、大きく描かれている。

このタイプは、現代の自転車の原形「セーフティー型自転車」が誕生する直前、1870年頃に、英国の上流階級を中心に普及し始めた。

この絵では、自転車を運転する姿を、路面から見上げるような視点で描いている。この視点に加

えて、絵の中に記載されているメッセージに、私は想像をかきたてられ、新鮮な感動を覚えた。

「The Bicyclist 1875」(二輪の自転車乗り 1875年) それに、「As seen by a Beetle」だ。

この型の自転車は、米国で「High Wheeler」の名称がついた程、前タイヤが極端に大きく、着座位置も高い。その運転姿を、「路面上の甲虫の目線からすると・・・」とした。メッセージにある1875年当時は、パターソンは未だ5歳。彼の中での追憶も含めて描いた作品なのかもしれない。

私の推測だが、彼の幼少時に革新的な乗り物として登場した自転車の様子を、その目線から「背の高い乗り物が迫りくる脅威」として感じ取っていたとしても不思議ではない。後年、その記憶に甲虫の目線を重ね合わせ描いたのかもしれない。

パターソンの世界には、サイクリストを他者の目線から客観視させ、様々なことを伝えようとする雰囲気を感じる。「Solitary Cyclist」(孤独な自転車乗り)(※9)とは無縁の、周囲を意識し、それらと積極的につながろうという像が見える。パターソン自身が、自転車を通して、自分を取り巻く世界とコミュニケーションすることを楽しんでいたかのようにも思えるのだ。

#### ～ サイクリストとしてのパターソン ～

パターソンは画家を志し、広告制作会社で家具の挿絵画家からスタートしている。このサラリーマン時代の余暇に、1890年頃には大衆にも流行し始めていた自転車に乗るようになる。ロンドン郊外の田園地帯をサイクリングし、その牧歌的な風景を愛し、沢山のペン画を残すこととなった。

1909年、38歳の時、脚に怪我を負う。それ以後、自転車に乗れなくなった彼は、徒歩で長距離の散歩を楽しんでいたようだ。

彼の作品には、サイクリストとして体験した風景のみならず、他者が旅行中に撮影した写真や、時には想像を基に描いたものも沢山あるそうだ。

そして、2万点を超えるペン画からは、当時流行の新スポーツとしてのサイクリング風景や、その成熟過程を、随所で感じ取ることができる。

#### ～ 「Is my rear lamp still alight, or Have I now become completely invisible?」～



ナイト・ランのペン画だ。左右には目を大きく見開いた木々。自転車の前のランプは煌々と前方を照らしてはいるが、後ろを振り返るサイクリストの表情はどこか不安気だ。真っ暗な森の中の道を前後のランプの灯火に勇気づけられ、目的地に向かってペダルを漕ぐ。静寂の中に、チェーンが駆動する音だけが、カタカタと鳴り響いている。

絵下部のメッセージには、「後ろのランプ、まだ灯っているかな？ もはや、私は完全に見えなくなっているのでは？」とある。

闇への恐怖ばかりではなからう。馬車も駆け抜け、燃焼型エンジンの自動車も多くなってきた時代。追突される身の危険も感じていたかもしれない。夜間に、街灯の無い山道を走行した経験があるサイクリストならピンとくるだろう。反射板のみでは、背後が心許なく感じられるものである。

発電機か電池による自発光型の「rear lamp」(※10)が点灯しなければ、背中から後方はまるで闇に吸い込まれるかのような漆黒の世界。背後の闇への不安は、明るく照らされた前方すらも、怪しげな空間へと変貌させてしまう。

絵の中の運転者は、自転車のリアランプの点灯状況を気にしている。自転車の後部右側面に丸い小型のタイプが一つ確認できる。これは、既に普及し始めていた電気式のリアランプであろう。当時の文献によれば、長い間、灯火の主流だったケロシンやカーバイト等(※11)といった燃料燃焼方式での前照灯のみの時代から、1930年以降には電球を利用した電気式のランプも選べる時代へとサイクリング機材が大幅に進化を遂げていたようだ。(※12) これらの進化の影には、その電源として、乾電池のようなバッテリーや、タイヤの中心にあるハブ内部やタイヤ側面で発電をする装置(※13)が発明され普及したことが挙げられる。

#### ～ 「Look all around for traffic and listen before crossing」～

英国「High Way Code」(※14)から引用した。

交通社会において、周囲をよく見るということは、安全に暮らす為の基本だ。その際に、自分を取り巻く状況を検知するため、視覚と聴覚は、常に活用して行動したいものだ。

方向指示器を出さずに曲がったり、暗くても無灯火で走行したりする現代の車両を目にする。一方で、歩行者や自転車も、スマホを注視したりイヤホンで耳を塞いだりと、周囲の状況には我関せずといった姿も、多く目にするようになった。

他者の動きに関心を持たなければ、人間に備わっている数種の感覚機能も十分に機能せず、周囲の様子や変化を敏感に感じとることはできない。

「自分の感覚機能をフル稼働させて、周りの人や風景に関心を持ち、コミュニケーションゆたかなサイクリスト人生を送ろう！」

もはや約100年前のパターソンの絵を通じて、私自身、そんな思いを抱く事ができた。「体育とスポーツの図書館」や、本との出会いに、感謝！

(後記)

パターソンの画は、その多くが、英国の牧歌的な風景とサイクリストの様子をモチーフにしたものです。他の作品もぜひご覧ください。

尚、前号での予告とは、内容を変更してお届けしました。「自転車に乗れますか PART2～歩けますか?～」は、またの機会に。

～ 注 ～

- (※1) Elliman's Universal Embrocation (エリマン社の汎用湿布) 1897年に雑誌や新聞で出した湿布の広告。(社名) Elliman sons & co.は英国ロンドン南部の単一自治体 Slough に存在した湿布メーカー。当時、流行した様々なスポーツ向けに捻挫や筋肉痛の解消の為の万能湿布薬の広告を展開。絵: Licensed under Public Domain via Wikimedia Commons.
- (※2) 「Knicker bockers」19世紀の米国や英国で、当時流行のスポーツ(ゴルフ・乗馬・自転車・登山等)で、裾が邪魔にならないという理由からもスポーツウェアとして広まった。日本でも、昭和を中心に、「ニッカ・ボッカ」等の呼称で、登山やサイクリングの服装として一般化。
- (※3) 「Bloomers」19世紀中ごろの米国で、コルセットで腹を締める当時の下着に反発した女性開放運動家により、当初は自由度のある下着として考案され、後にスポーツにも利用されるようになった。日本で言うところの「ブルマー」である。この下着を広報したアメリア・ジャンクス・ブルマーの名前に由来すると言われている。
- (※4) 「Stephen T. Dadd」(1879?-1914) 英国のペン画家。ロンドンニュース等、様々な媒体に、サイクリング、フットボール、陸上などのスポーツの画を寄稿。当時のスポーツの様相を具体的、詳細に描写。
- (※5) 「Cycling Weekly」(1891～) 自転車の一般大衆への普及とサイクリングブームを受け、当時26歳の Edmund Dangerfield により、週刊で発行されるようになった。初発行から間もなく、自動車の台頭により、そのタイトルが「Cycling and Motoring」に変更された。「Motoring」は、今の「Car-Driving」の意で、敢えてその表現としたようだ。
- (※6) 「CTC Gazette」1878年創設の全英サイクリスト団体(Cyclists Touring Club)発行の月刊機関紙。1880年前後から発行。現在の団体名は「Cycling UK」に、機関紙名も「Cycle Magazine」に改称。
- (※7) 菅沼達太郎(1899～1976) ※生年没年 2023/2/22 修正  
現在、現存する日本最古のサイクリングクラブと言われる1946年創設のNCTC(日本サイクリスト・ツーリング・クラブ)初代会長。ハイキング・山岳・サイクリングとその活動領域は幅広い。法政大学山岳部OB。
- (※8) 「だるま自転車」前輪中心部にペダルのついた自転車。その原型は1863年にフランスで誕生した「ミショー型ペロシペード」と言われている。後に1870年頃の英国で、ジェームス・スタンレーが、前輪を後輪に対して、より大きく改良したタイプに変更し、英国通貨由来の「Penny Farthing」や「Ordinary」型の名称で普及。
- (※9) 「Solitary Cyclist」英国の小説家 サー・アーサー・コナンドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズの一つの題名。短編小説。1904年「ストランド・マガジン」に発表。舞台設定は、自転車が普及した1895年。当時先駆的な女性の自転車乗りも登場。探偵冒険小説。
- (※10) 「rear lamp」※5の「Cycling Weekly」の記事中でも、1900年代初頭から多発し始めた自動車等による自転車への追突事故の防止の為、存在を示すためのアビール用後部ランプを装着する等、安全利用啓発が積極的に掲載されるようになったようである。
- (※11) 電化以前の自転車や馬車のランプには、燃焼させる為の燃料として、パラフィン(石蠟系灯油)・ケロシン(灯油)・カーバイト(アセチレンガス)等が用いられていた。
- (※12) 英国 BIRMINGHAM とその近郊の CONVENTRY や、NOTTINGHAM 等の地域では、当時、「ROVER」や「RALEIGH」等の一大自転車メーカーが数多く軒をつらね、周辺では様々な部品メーカーも台頭した。1900年初頭には、既にハブ内装型の変速機メーカーも誕生していた。
- (※13) 発電機 DYNAMO の登場。いわゆる「ダイナモ」として、日本でも長らく、タイヤ側面の回転を拾い発電する装置として一般的であった。1930年代には既に、英国「STURMEY-ARCHER」社が、現在の通勤自転車も多く採用の「ハブダイナモ」を開発、販売していた。
- (※14) 「High Way Code」英国の Department for Transport (交通省) が1931年に定めた「道路利用者のための交通・安全規則集」。歩行者、乗馬、自転車、自動二輪車、車等、全ての道路利用者が守るべき規則集。

～参考文献～

- ・「サイクリング・ユートピア フランク・パターソン画集」  
(Frank Patterson 著、2013 文遊社)
- ・「The History of Massage: An Illustrated Survey from Around the World」  
(Robert Noah Calvert 著、2002 Healing Arts Press)
- ・「(月刊誌) ニューサイクリング 1968年 3月号 NO.44」  
連載対談「やあどうも・・・」菅沼達太郎氏/サイクリング初めのころ  
(発行人: 今井彬彦、サイクル出版株式会社)
- ・「毎日グラフ別冊 富士山」(1970 毎日新聞社)  
(記事) 登山の履歴書 文/スケッチ 菅沼達太郎
- ・「漱石とホームズのロンドン」(多胡吉郎著、2016 現代書館)
- ・「英国式自転車生活」小池一介氏の Website  
「華麗なる双輪主義 スタイルのある自転車生活」著者
- ・「A Brief History of Bicycle Lighting Technology」(民間 Website)  
[https://www.sheldonbrown.com/marty\\_light\\_hist.html](https://www.sheldonbrown.com/marty_light_hist.html)
- ・「Slough history ONLINE」から当時の湿布メーカーについて Website (財団)  
Smoke, Steam and (Computer) Chips / Elliman, Sons & Co.  
[www.sloughhistoryonline.org.uk](http://www.sloughhistoryonline.org.uk)
- ・「THE FRANK PATTERSON SOCIETY」(民間 Website)  
[www.thefrankpattersonsociety.co.uk](http://www.thefrankpattersonsociety.co.uk)